

曉齋畫談外篇 卷之上



金剛之

巨勢之

如空曉齋所藏硯

~~E  
186  
3~~

道通文庫  
文庫 6  
1297  
3





繪  
7  
1



瓜生政和著

# 暁齋畫談

河鍋洞郁画

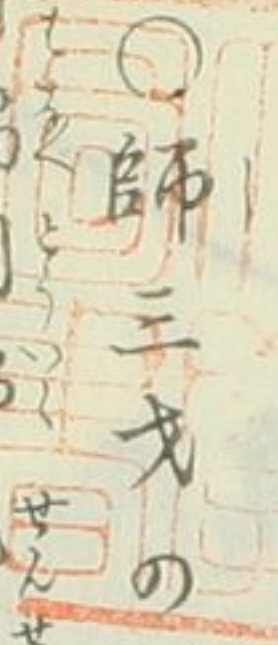
早稲田大学図書館

011688993689



暁齋畫談外編卷之一

東京 門人梅亭我叟 編集



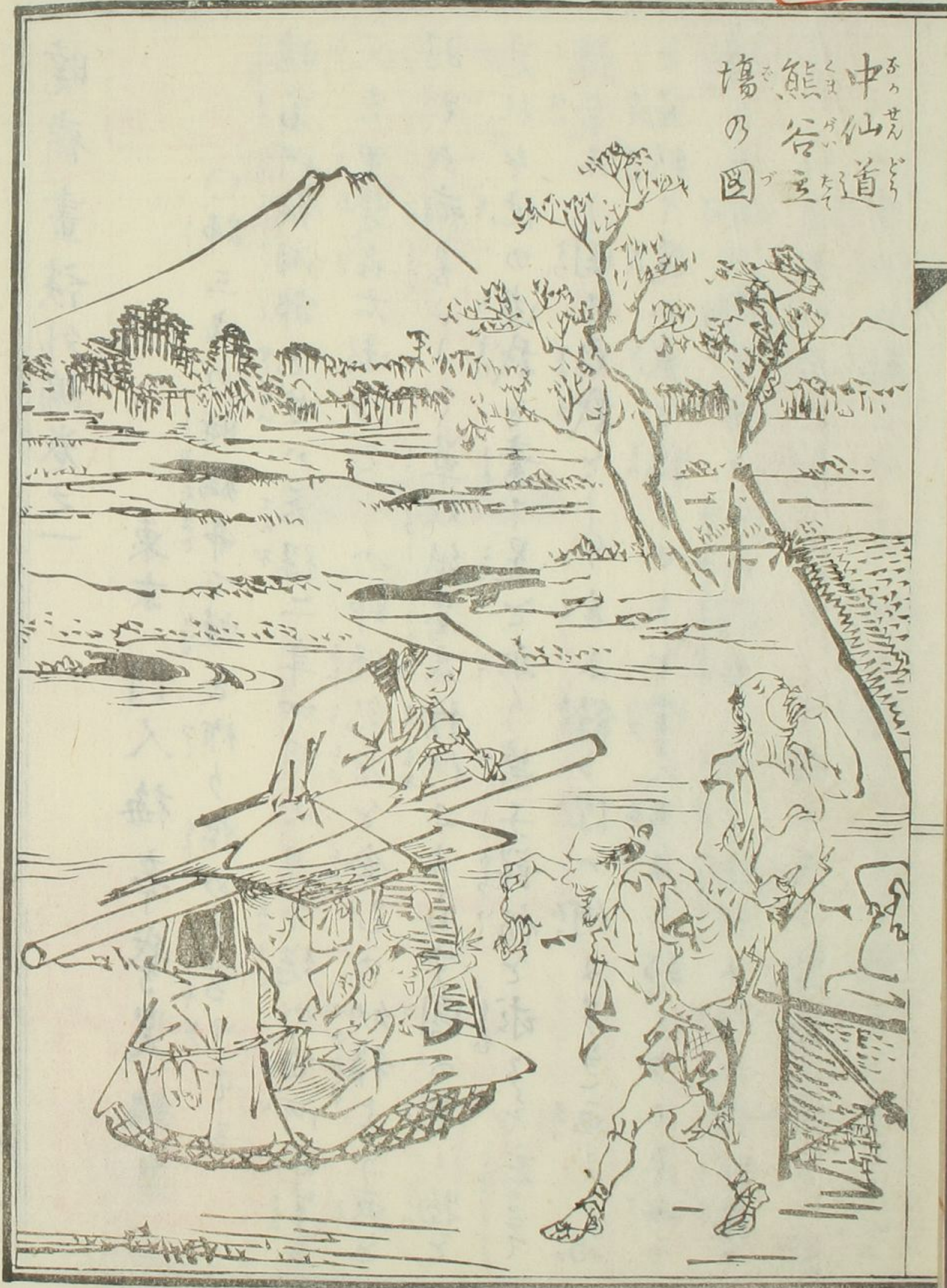
外一ノ一

暁齋河鍋洞郁先生、天保二年四月七日、下総の古河小幡に  
 父を甲斐在右衛門と、師猶乳房を合むの幼稚より画を  
 好む、疔瘡甚しく、草双紙、墨画、何ふやら、不図の有る物を  
 見れば、他の遊戯を棄て、是と取り、菓子餅飯と求むるを、忘るる  
 餘念ふ、因て悪戯を、子に餘ら、際ハ何は、まき画、まき画  
 と宛行、是は、氣を、稿させ、るを、常ん、あり、師三才の、春母、不  
 誘、これ、母乃、郷里、ある、上、石、館、井、の、在、喜、梅、村、小、住、江、館、林、藩、小  
 田、口、七、左、衛、門、方、に、到、ら、ん、と、し、母、と、共、小、駕、籠、小、乗、り、て、往、  
 ぐ、供、力、男、師、に、耐、え、よ、と、し、蛙、を、捕、え、り、又、以、師、是、を、菓子、餅、飯、小



文庫6  
1297  
3

中熊の場  
仙谷の  
道立の  
図



外一ノ二



惟  
徳  
印



入て菓子と共小唄小置き供に清々小笹の枝を採らせ前  
貫ひし持しる如新申を出し小笹の枝を長短小折し  
小美一是と豆と做して桂の形小作りたれが供の男  
駕籠を昇たる若ら手を拍て是ハ出かしたる放せを飛  
すまぎどとて譽染せしも理小あん斯く青柳村の田口氏  
着せし小師ハ庄敷の偶一往き菓子袋の菓子と投そ  
持たる各立と信て彼の桂を菓子袋一寄生あやしが寄生の  
始めありしやかん

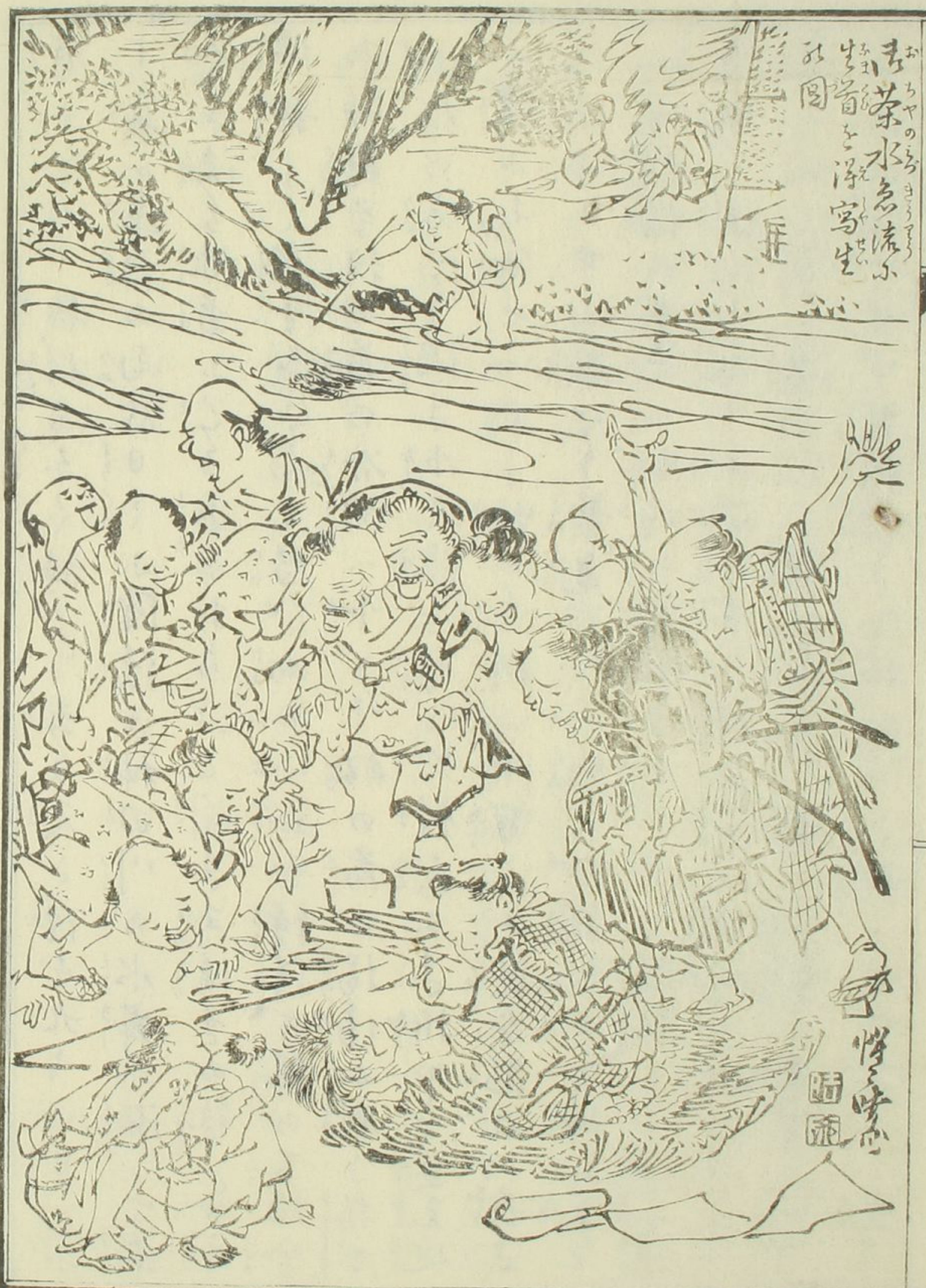
○師一勇斎國芳の門小つる又生首を寄生  
斯の如くあれバ父も其好む所小従がハせんといハ  
湯島茶水の火消屋敷小居らせ七カの時一勇斎國芳の門  
小つらせり因て浮世画を学びたきども師の心小降さるる

有しを以て幾程もふく辞し去り又と往て九カ月の夏名小  
一負ふ鼻目の雨は日く小降續き神田川の水岸小漲りて渦  
巻き流る様常小なる取小あらびと聞き其流きの勢いとそ  
傳親し寄生あさんと思ひ雨の小止を待得て揚の馬場今  
の師範学校の前の谷間一トり船の荷の揚場小到り弱水  
道橋の方より渦き中水水を空に餘念あき折から足元近  
く波小寄せられし物あり何小や有んと是を兄れ長き  
乞泥水の中小靡けり箕亀とソ小物々杯思ひ手を伸て乞を  
握み引揚れ是ハ如何小男の生首ありし故得として傳  
投出し遊人と為しが踏止まり泉目若人形師の造つたる生  
首を好む寄し採りたる事あきども真の生首ハ得難き物也  
是未だ寄生せず其得難きを得あがら怖しとして空しく棄る



八 跡合あり家小持帰る字生せんと思ひたれども現して控  
 たり答られんりと思れ其首を草の中へ隠し家小走て風を  
 敷と持来り首と是小包にて度り間を窺ひて寫さんと物主  
 の偶へ隠しこたり然る小下婢氣を出さんとして此首と刀  
 附キヤツと叫びて逃出せし故父母何事ぞと往て見て回  
 怖り驚く事大方ならず師走せ至り首と仕舞玉ハ小子小  
 子云く乃証あり拾ひた是バ寫生せん為ありと云ふ小食く  
 呆れり呵りも做さば吾たりしが彼程思ひ込しを寫せざら  
 も不布意より然れど答られし一言許せんあを矢張揚揚が  
 魚つらんとい首を薦小包と再び揚揚小遣られ其薦の上小  
 て是を寫す小流来り世を所あれども子晚見物山を做せし  
 が幸い小答むる者なく書終り用意做して来りし親を經る

外上ノ四



お茶の水を流す  
 首を写す  
 此圖

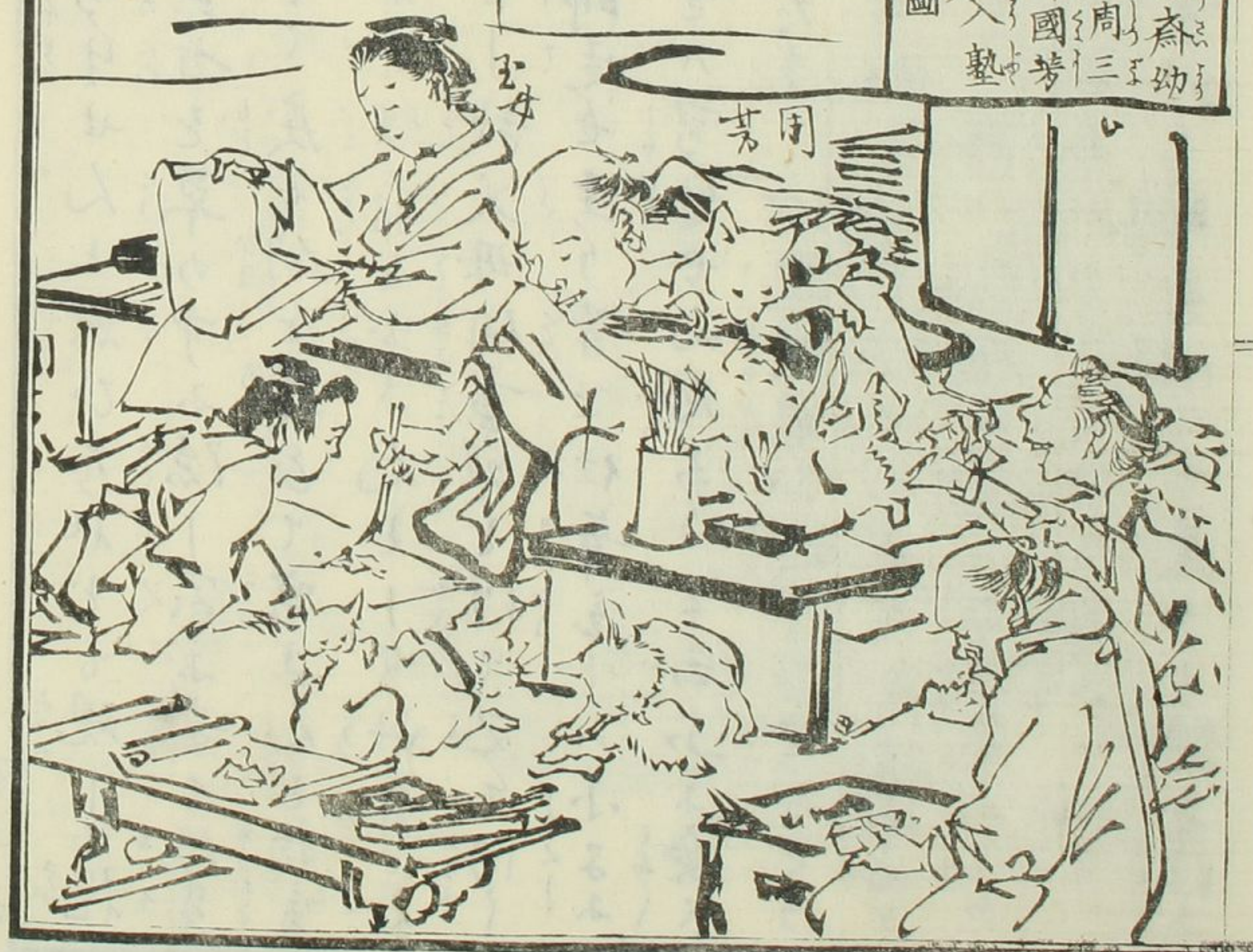
竹屋  
 印



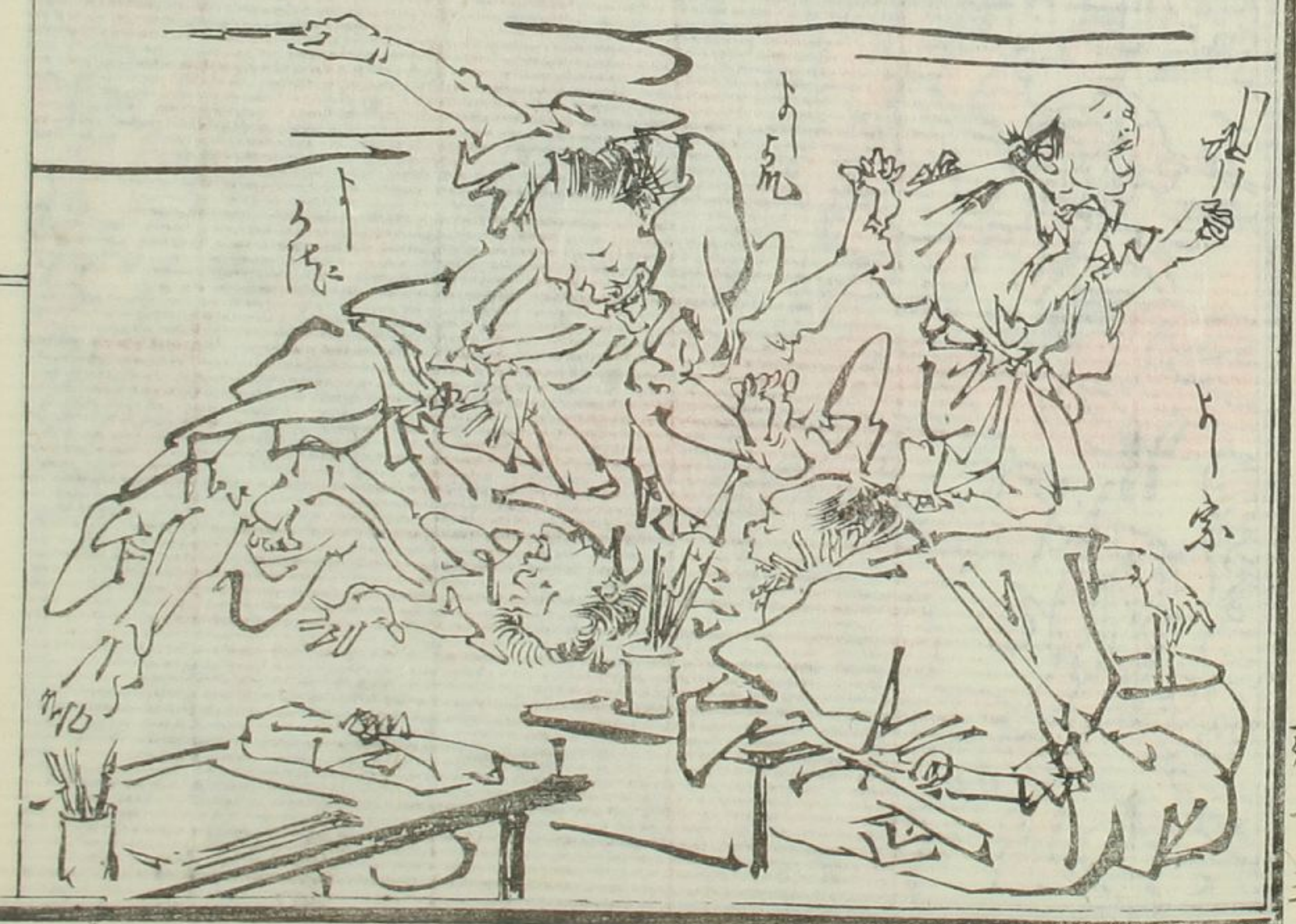
首を包み又流し水幕  
 と做したる小未だ十才  
 小を充さる小児の業故  
 う幸いふし官の紀  
 小も遇ざりき人足を  
 聞き画小熱心の取より  
 出さる剛膽ありと評し  
 歎しぬ

○暁高幼時國芳六塾  
 暁高年甫めて七歳肉三郎  
 と云しとき故一勇尙國芳  
 の門小苞ぶ國芳之末流最を

暁高幼時國芳六塾  
 時周三  
 郎國芳  
 入塾  
 圖



好むの性質なる故師を奇童  
 とし愛し常小教て云我  
 武者を画を好めども其據  
 如と考る基礎を得ば一時  
 宋人李龍眠の描き一水滸  
 傳百八人の像を見大い  
 小感ぜり歎有ふし是を  
 摸し錦繪を画たる小初  
 めて國芳の名を人し知ら  
 る小至りしり思ふ小武志  
 を描ふハ突如小人を拵出  
 せ投りせたる身拵小目と着







丙午年九月  
 本郷丸山  
 大火標の  
 島越の  
 島を越え  
 を島を越  
 の図

時を去



まや  
仙菜の  
水た酒  
石た酒  
の祝  
の祝  
の祝



外上ノ七

外上ノ七





或ひの紐伏し返返すと有る体杯心をして其息込を画一に  
因てこの喧嘩有む驅け見物一裏衣小入る夫婦の言争ひ  
を尋ねあきて叱られ一事を有らぬ故方一勇高おは性た  
弘化三年正月十五日本郷丸山阿部侯の上地より出火し  
西此の風特小猛烈ありしを思ち小焼度がり遂小佃島の  
限り小迄及びたり是を丙午年の大火と云ふ此際小本郷三  
所日小位せ幕府一多の用を達せ越前屋といふ者有らば  
尸野鶴孔何小れ飼さるゝあ一火事を催て諸の多と能  
小のれ揚の馬場の傍陽一運び込もたる小諸方より小種  
の荷物を持ち来り此処小置甲急度場ハ忽ち單首葛籠少煙  
火の子その上小落敷りそあくもり燃揚りけむハ熱前屋

の主人籠の鳥の焼死んを懸籠の蓋を明し鳥を懸く放  
したる小其鳥一度小飛さち燃誘る火の光り小美し紅翅の  
色映ト花と紅葉を蔭敷したる如くあり持小孔雀の美態  
さ小彼よくと聲を掛けんと空と見上るり去馬ハ鳴るま方  
一飛ゆゑ火小焼れ煙小巻れ空小堪得ず舞ひ落るさま珍ら  
う小し又哀れあり此火ハ之師が住一る火消を救の方よ  
り後り来りしあれを此時火消を救ハ一面の火とあり師が  
家あり火既小燃ゆて人々力を盡し家具を擔ぎ出す中少師  
ハ唯硯と筆と紙とを持ち出風さ小積上たる荷物の上小  
膝がり鳥の飛立たる様と我が屋敷の焼落る所を寫生さ  
るハ則ち小揚たる二葉の図あり親族の者之を足々大小可  
り他人さ一驅付荷を運び出しそ援を為す小獨安閑としそ



画と書と詰るハ何事ぞと言れ天宮と捲あづろ吾我も存せ  
運び居たる小鳥の飛立たると思へ古人も画うざる事画と  
思ひしとて是と写生あせらうと其処の燃えさすは処の境  
後了体小心を奪ひて我を忘れて書居るありり免くこと  
言ひあづら火事頭巾冠り飛出たれど猶波方中方少多を  
火炎の勢い煙れ三才火消の痛き人の馳走るると小心と止  
て更ふ餘念いせりしとぞ

○写生と為したる鯉氣と吹て人と名怖させ  
車各駿の臺の觀者改小暮村の画師少狩野綱白とソノ人  
ありけり當時三双の妙手ありて故ふそ門小遊びて画と学  
ぶ者多し師も又人の進めふより十一才の者その弟子とあ  
りて入塾あり同塾に書生小貞ト心そり畫夜の初強筆を積

外上ノ九

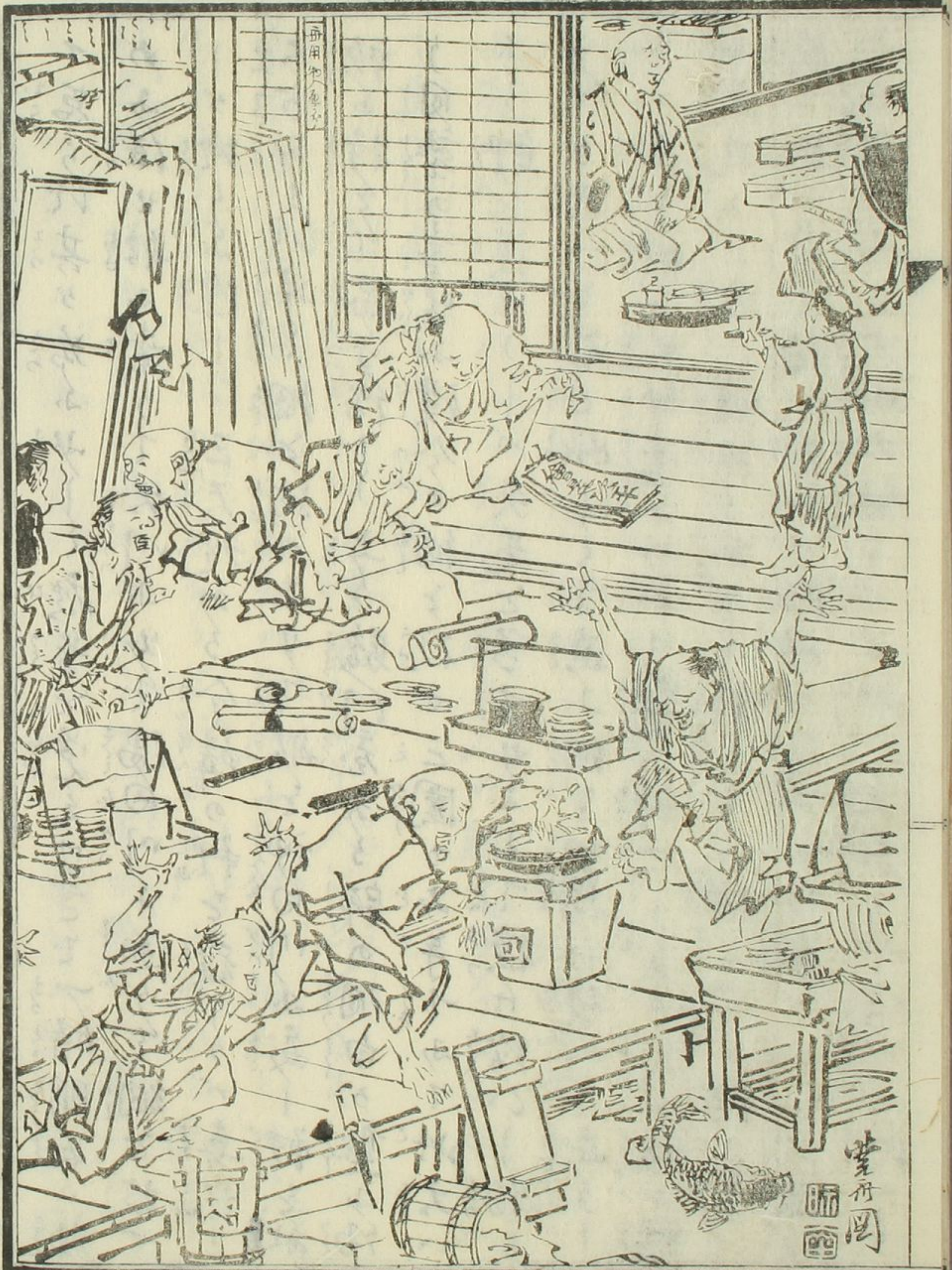
て寫らば其が為小少く夜号と覺えりきを一時朋友の初  
め小江せ船小乗りて大川小舟を陽田川小瀬を網を投せ  
しぐ候り小際しそ三尺程ある金鱗の鯉を獲しりて喜悅を  
大方ありて早々網を納めさせし船を神田川小舟に輕を船  
頭小持を寄す候し上り駿河倉ある師の洞白が塾少内  
り同塾の書生小僕今白網を投せ三圍のあ手小舟を此大い  
るる鯉を獲しりし天是と写生せよとて授け給ひし物な  
らんと思ふも最と嬉しとて直小網を切揚げ獲つて長りし  
ありしとて輕を大盤臺小つれり塾小持也と書き寄す後小鱗  
小尻尾小二十六鱗跡ありて種くありて小宮し候る筆と  
投て一息と傍を見れば何時の名あり同塾の人とて楢頼  
小紐板と居え大四大鉢とと雙べ立最とや宮生が溜た





野 駸 野 駸  
 洞 河 洞 河  
 白 臺 白 臺  
 氏 符 氏 符  
 邸 宅 邸 宅  
 圖 圖

外上ノ十



堂行図



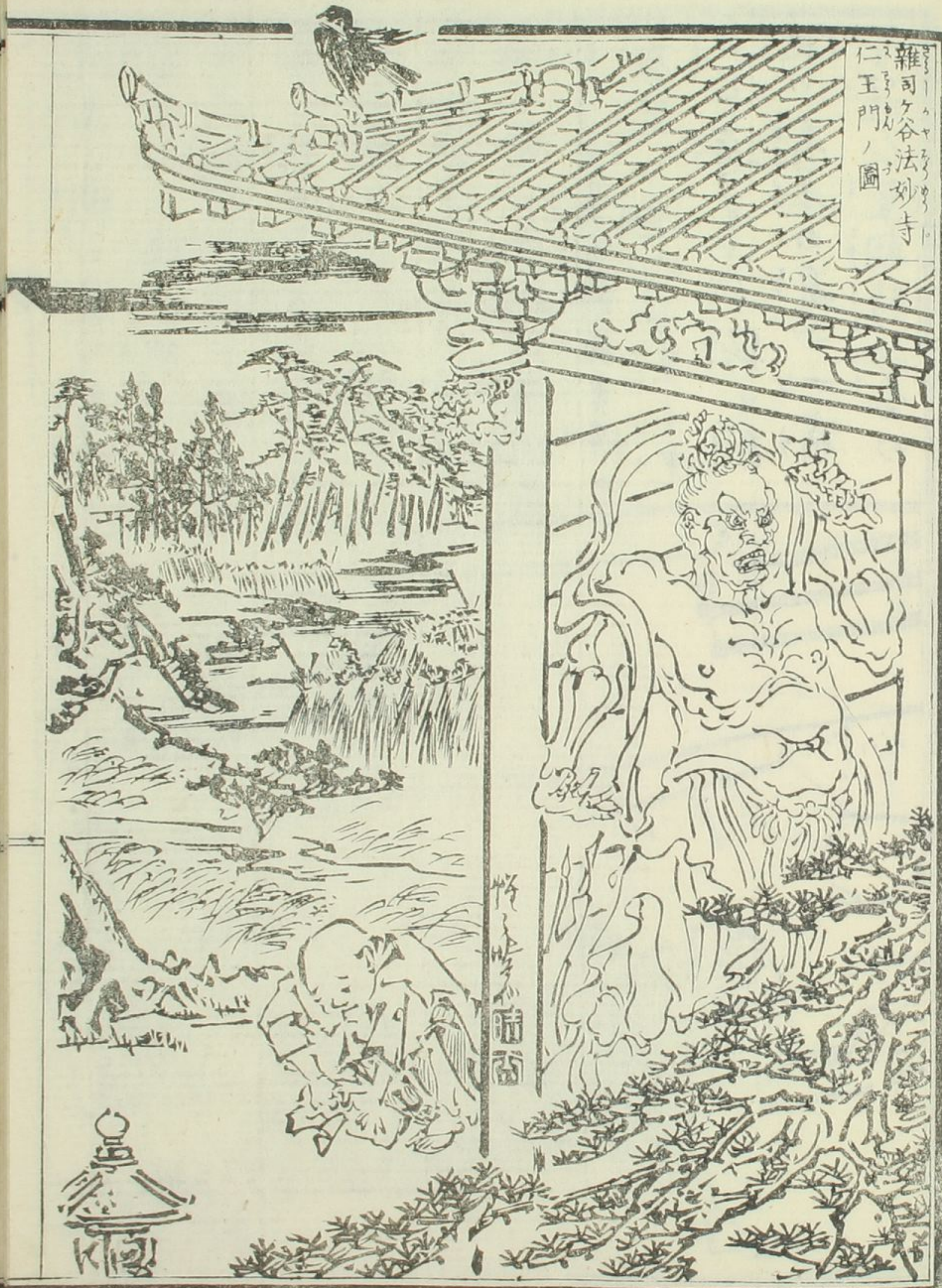
む危丁小取掛うんとを鯉の盤基を大勢して持出す故師驚  
いて押止め心無とを仕給ふものう不僕今此鯉を宮へ  
たるが考の小葎のそる所少ふからび減少鯉を画くの師と  
難有く思ふあり固く厚く積を述る後思ふる多し持難  
難矢の池小放ち遣うて天壽を保とせんと敢ふる争で  
君らの版と肥はづきと言を回塾の人々嘲り笑ひ吾此を信  
が平常の乱暴は似合しからぬ辞る正銘江戸茶の鯉の味  
流心の事際を見居給くと一人の男が袈掛け危丁取て鯉  
を大廻板小核と一隣接下て既小白又と立ん為し時一  
く鯉踊り口より金色の氣を噴き其光り虹の如く小見え  
きバ人々驚き沙竹新堀の鯉塚の常るあぞ思ひ出し十  
五れ生ぜしうバ是ハ洞都子の言小如く不忍の池へ放す

如す我も由接け、俱に接ひ法んとを鯉を又大盤基の中  
の書生大勢掛り悪ぶが岡へ荷ひ法ま辨矢の池小放ち遣  
うり外時より一師の鯉を画く人の末は心附さる  
不思儀の筆意を得たりと云ふ又此鯉の吹さる氣は穢  
向ても今ふ其何たるを解せざとある

法妙寺小仁王の圖を取り帰路賊小出遇ふ

東府の西の街外より難司が谷と呼ぶ地あり此処少  
鬼子母社の参詣の人群集ありたる御堂ありしが今  
寂たる法華宗を法妙寺といふ常寺の表門小安置あり  
るに仁王尊天を運慶の作とす其名最高一師一日此難司  
若小法王仁王の像を宮して餘念無りしが梢小鳴噪く鳥の  
聲小心附首を回らし見えハ日ハ西山小落て四辺薄曇り





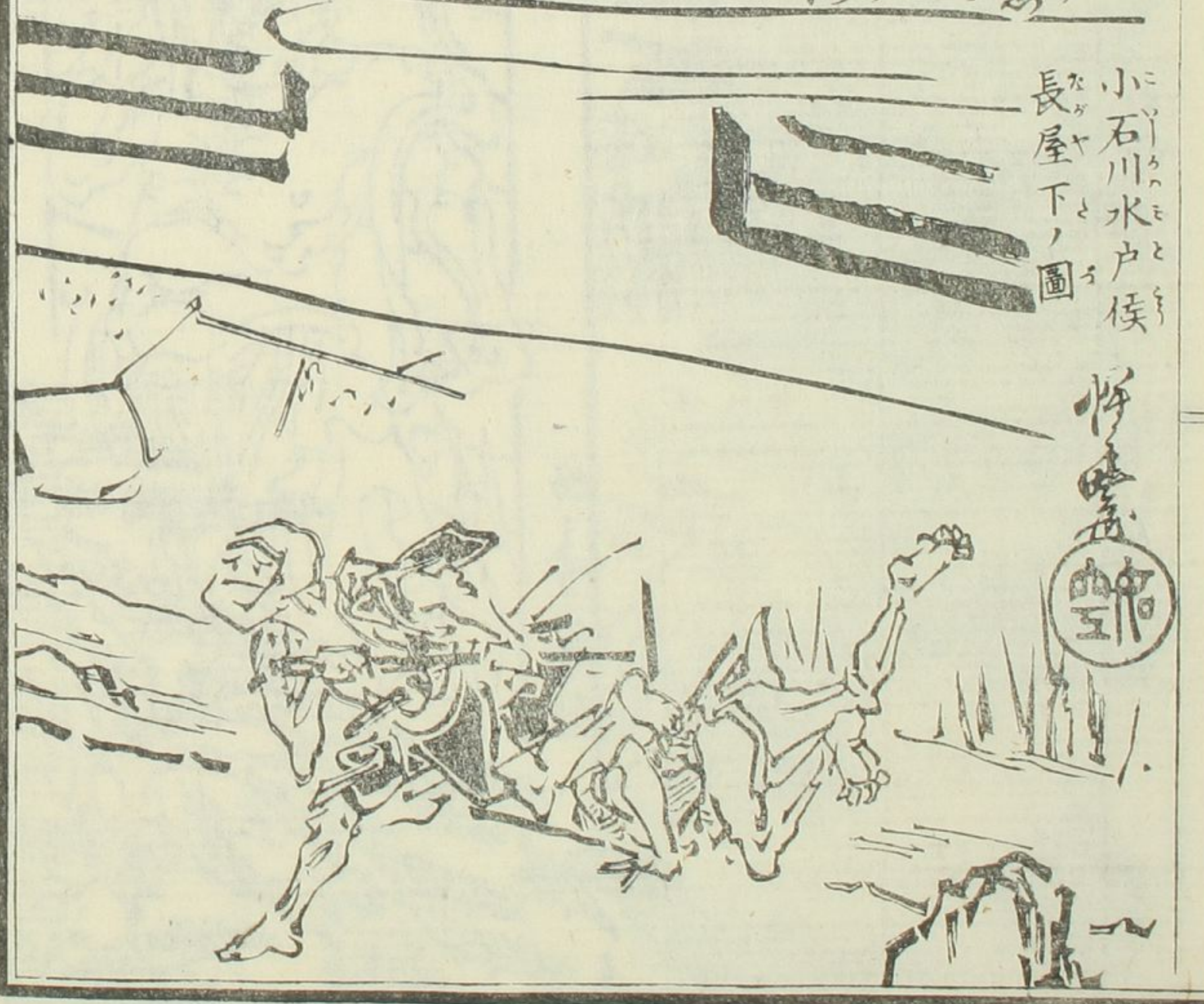
雜司谷法妙寺  
仁王門ノ圖

惟新寺ノ圖

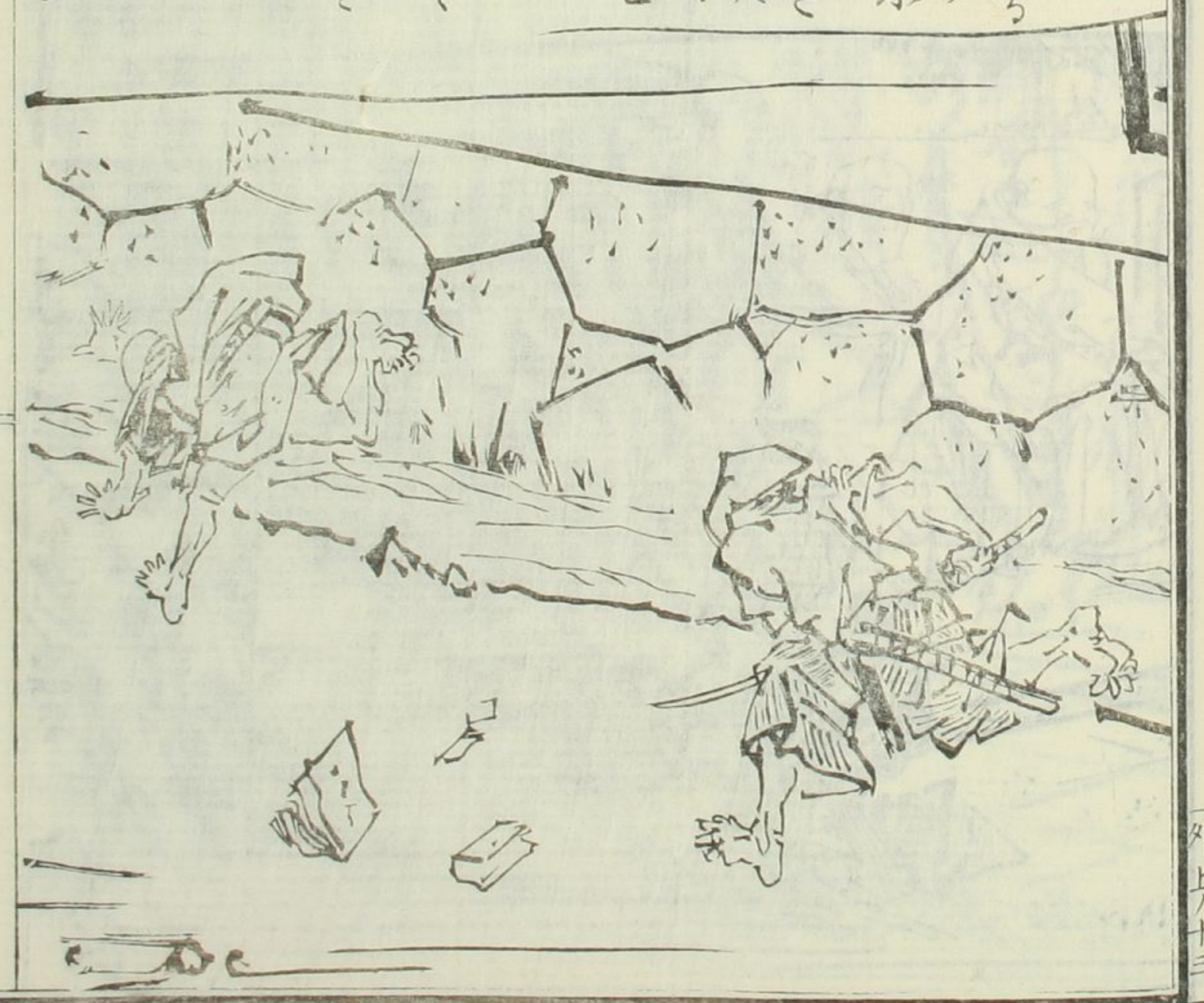
ありけり茲に於て心驚き道の遠きも忘れて思ふ寸日を嘗  
 したると急き矢立を腰に挿し宿を恨を懐中あり法妙寺  
 を立出るに早鬼子母神の堂あり燈附たり因を足の子め  
 自由基の通うを真妻水邊所一あり江戸川端より旧水戸  
 侯の百間長尾下今の砲兵本殿の所一棗り一頃ハ既小成の  
 刻と有り甲田云ふ處所あり故門を守る犬の聲揚摩の留  
 のと出る師ハ急淋しき杯ハ頓着せぬ故橋法妙寺の景色  
 ろやを胸に著して往來小舟を提ぐる三人の男実態と現  
 れしを左六より師が神を捕んとせし不怖り突降け膽魂魄  
 と諸共小豆を飛しを逃出せて三人の賊ッレ捕つらと者掛  
 け白刃を振て追ふと急あり師ハ雲霧を踏思ひしつ水戸郎  
 より流せぬ細川小渡せし石碣の端を走りて通つ越へたと



追来し賊の長を長中と  
 思ひし一騎の賊が流  
 され尾破と走込んや落  
 たる者も二人の驚き是  
 を脚つて引揚んと為り  
 閑ふ師ハ走延て水道橋  
 外より青木新五郎の  
 居敷へ逃込み幸く虎  
 口を遁きしり新て長  
 夜に青木の奥に一宿  
 とてい聖朝駭河基の



狩野小次郎合塾の若小  
 昨夜の話しめて残るる  
 其の跡れお是より年来  
 彼処此処にて圖を取りと  
 る手帳を包の俵あて流  
 せしありと頭を垂腕を  
 組之流擔をふる其折か  
 ら去閑ふ来し人ありて  
 取次の小侍お一拙信を  
 小石川傳通院の正眼と  
 中者あり所お水石炭の  
 長屋いよて此包を捨ひ





幅紗を解て括れば字  
 生の手帳と覚しき小  
 駿河基狩野塾洞都と  
 能して有る故抄系な  
 したりと云ふ声遠く  
 聞え一故師の飛下出  
 其俗の厚志を耐一塾  
 一書トク夕アの様を  
 画小書て話したるを  
 則掲け一下の圖あり  
 傍る此画を大ソ小好  
 一足を師少乞ひ懐中

貞光院  
 墓前  
 三番  
 舞  
 圖

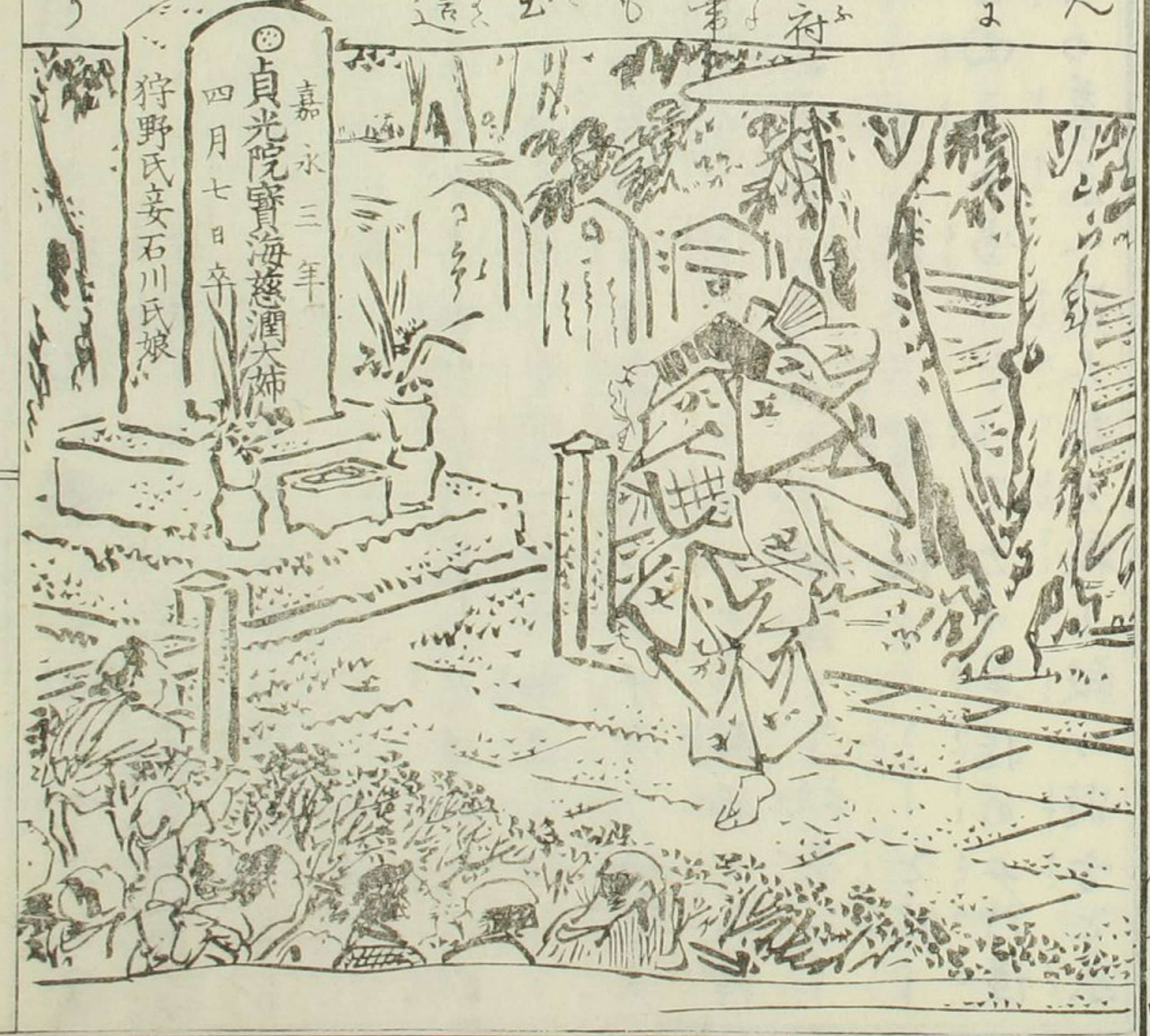


葉

小一々帰りとある

○貞光院の墓前  
 三番舞を舞ふ

狩野洞白の徳川幕府  
 の画所ある故塾生第  
 小数十名居り何れも  
 夜小つると塾を抜出  
 一淨瑠璃の藝古所遠  
 入りする有り軍書  
 講談及一嘲一の字  
 一徒あり了思ひく  
 ろる其中小師の掃



嘉永三年  
 四月七日卒  
 貞光院寶海慈潤大姉  
 狩野氏妾石川氏娘

外上十四



啓小問を得意に能狂言を學ぶと以て樂こと做し且身の運  
動と解しとせども是を知る者更不許し一時洞益春信男狩  
野原信の祇母貞光院と謚せし人師又問て塾小在若刀祢ら  
ハ何事も樂とありと聞ゆ人身の河を做し給ふと云れ問お  
れば狂言を習ふ由を告る小母悦んて高も若き村よりは  
業を好り狂言を習ふとあら高共費用の金の冊けせんとい  
是より此小母小狂言を學ぶ金を恵れたる無しと母常小  
其身を踏とらるの三番叟を見しととれける故師も又得  
意で許さんと考し其事果さる小母痛く故果る  
も黄名の藉ふつれたる因て師の共業を做さるしと悔  
嘉永四年四月七日三回忘小當りといて史の菩提所上竹護  
國院ありと光院信女の墓前一箇を靴大靴小靴の類方と集

一昨ハ是り手向して三番叟と舞たりけむ近方の金問  
元見物あり成が佛お心善の尊まを憾とぬ此変お出せし一昨の  
洞都が守生做したる當時の様ある故今また其圖を採し採  
り事の表表ありと掲げて滑稽を流の看らものと為しける

○西澤寺林法泉和尚

武蔵國川越の五木松原村ヤソ小あり昔村の西澤寺小住職  
する林法泉といふ人の嗜高氏の門人ありが幼稚より大い  
小画と書とを好し妙と譽れづまい不動明王の像と書原明  
王の像より回て今法泉和尚が常小得言として筆と採とふ  
その愛深明王の圖を常し出して此お掲中同門二三子の  
為し不すと云ふ

○欣澤ち大江学翁和尚





林法泉和尚  
画室の圖

如雲峯松堂 隱



伊勢國山田の飲淨者任職大江守翁も又吟首成の門人少く  
 画と書と好とおるし佛画も長トたり考寺の近江中の方地  
 を以了知し是源宣上人の筆と推りたる隔紙屏風御立天丹  
 小々吉田兼好が樂書ありたる物なりて遊歴の風流家又好  
 事の人々ハ鯉々見小注く所たり前年火災小罹り老々焼失  
 せ当寺寺宇焼失後ハ任職大江守翁ハ其再建を計り法圖と  
 遊歴し々勅化奉加を頼むを先てありは画源宣上人図花  
 鳥河波の美ありく好く小熊トて筆と下し之と画て施主の  
 志ハ小報ゆるハ宮少風程の所至りりと氏ハ其筆を因し  
 愛小筆たり

○貧翁小画と書て共ふ



本邦名所少彦左官職佐十と云ふ年七十四迄く一壁と成



大江學翁和尚  
 仏画を描くの囚

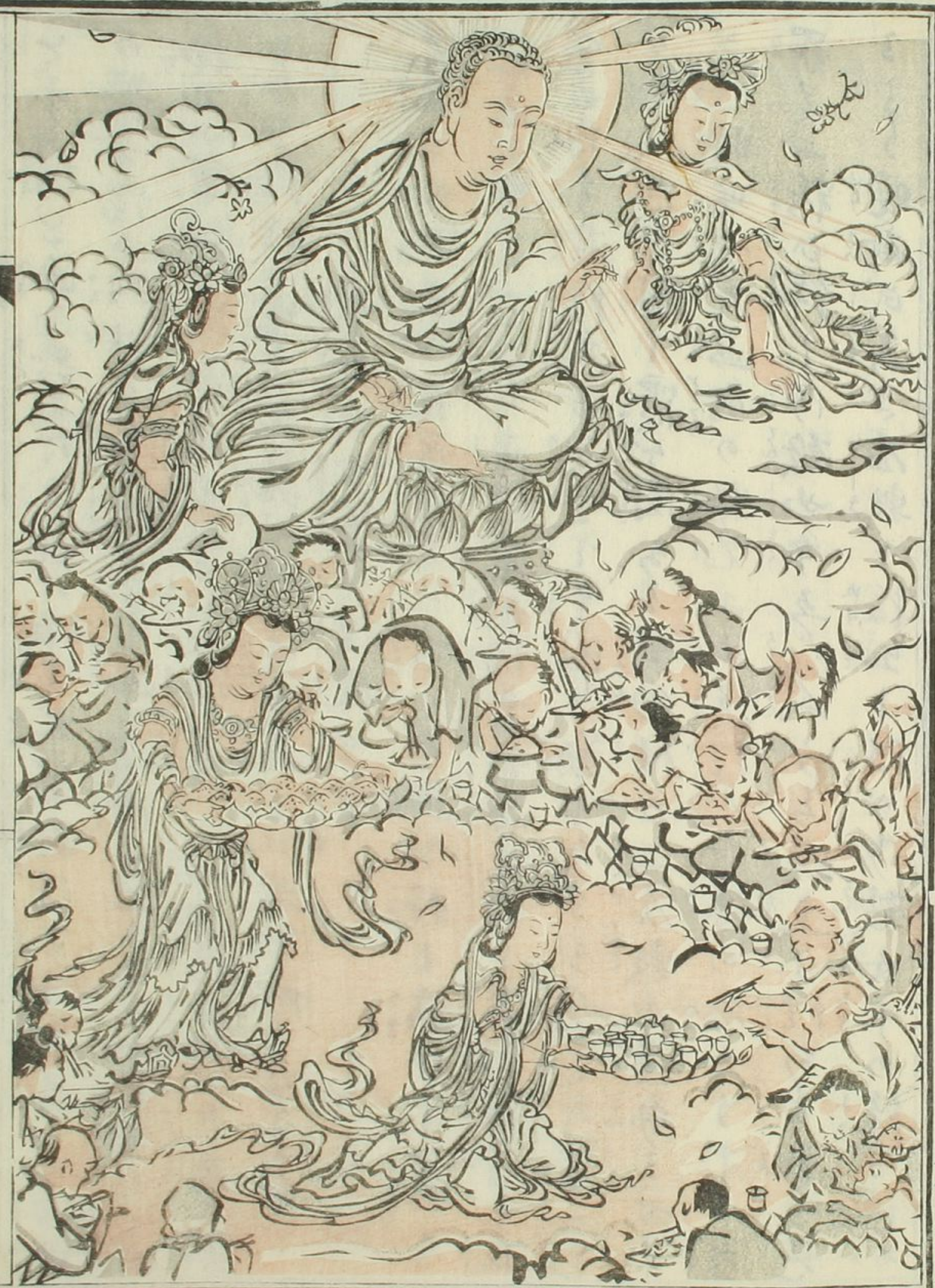


如來畫を  
 描く

たれども元劫中の若るれば是を衣之衣  
 あり故飢渴身お迫りてめ海と若方なきは  
 と又て唵言氏之と憐細川玄以法帝が比  
 一初以法能の合狂言お基きそ後篇  
 の心といひ言たさる地獄界不第氣を  
 ろよ十王の閻魔王をぬとて五逆の真友  
 山あそび皆松葉よ玉ま  
 の友ふ所人筆と新鬼の  
 厚く角と切あう是と  
 南畑工も考まきそ小  
 巻鉢と極つ花獄のな  
 の後より強陀め東のわ二融お到  
 り飯糰存人おあんとそそまな







左官佐十地獄の不幸と物語

世の



とせし様と画して呉えたりれば佐十大夫お喜びお逢表号々御方の  
の態も事場お持はせしと飾りて畫の儀澤をばしたるお見聞の心  
拙物お實接を授たま故思ひの金の貯へ神田格お町お應の家  
と承りて引移り暖富氏の許へ礼を奉り再生の恩を謝したるごと

○暖富氏女帯の模様と寄

筑前の大守黒田筑前守公の大小畫を好み強ひしと云  
赤永七画年家傳の画師尾形洞青傳様始々其外幕府の画  
家の内より其繪不お多きて其用を勤めたるが暖富氏も又是  
が畫人たり回下霞ヶ関ある黒田侯の工屋敷お通稱せし  
が一時暖富氏画師の物乞お出送往人と稱の右たりし奇  
羅美お糖の飾し御殿女中五人とも連立を往り是を見  
るより暖富氏名を在敷と振出し波の御殿女中の後を追

け漸く是つきて女中の尻お着注と三四町程おしを在敷一  
疾より一人はとと養父坪山洞山お告しり父の且呆れ且怒  
り暖富氏と呼び近づけ汝去る日お霞ヶ関の画師を振出し  
て云々の事有たる由は左程の好色あり画畫お成得  
ぞしと恥ぢけおあらん少後の筆と授けり藝妓の御迎しや  
半べー女の尻お所へおけり好りんと呵られ暖富氏を意  
を撥き吾史を大いあるお違り黒田侯の宮中と通りたる  
御殿女中が御下しに模様ある帯をよたりしと名止たる故  
追かけ往て其模様を言し取り来りしお好色の為おめら  
ず其取り来りし帯の模様は則ち是ありとて宮へ来りしを父  
お見せけしを父の喜びお様うて者しり然らば女中お所へ  
往りしよりハ帯に御しけきたるありと笑ひしが黒田







同

東京神田明神衛立奉納ノ画

雲漢筆

欄



外ノ二十一

豎六尺  
横九尺  
總金地墨画

明治廿五年四月廿五日  
如空院所地取







外ノ廿二



河鍋曉齋ノ筆

龜有大夫田村講中ヨリ下總成田山へ奉納ノ額

總金地極彩色

横九尺 竖六尺

惺々曉齋画





同曉齋ノ筆

曉齋洞郁陳之画

全晒



外二二三



總金砂子極彩色  
豎四尺  
横六尺

明治七甲戌年三月廿五日

湯嶋天神開帳之第 奉納繪馬之圖



つゆりたりしに出来好といふ賞せらむは再々西條城  
御具屋の総竹屋ありて丹青の多用附屬を盡り是より古名  
画の繕ひるどとしく大い其他の唱事と交り賞興も其  
後と東照公の守護御尊と孫と芝山内里御尊河童河童  
のしよ狩野洞白外二名を撰と少きしを搦信のまたる雄の  
又孔雀の彩色とふきり足らと以て徳川幕府も深く其  
筆勢の活潑あるに至り又と極めて温かると彩色富画  
の細うあると愛せられし屬西河内附屬を盡りて神社仏堂一  
奉和の繪馬額と人の看みまたるを数多くし今更小異一  
巻一難しと雖も多しは尋常小筆と撰らむ或ハ二三年於  
る物たり或ハ半日一日おしきま上る物あり就中江石神田  
明神の獅子の如きハ氏の住居する湯島四丁目小をきと以

そ神官同宮氏小妻孫られ連ふ是を法合ハ法合たれども或  
ひハ事ふ給は或は氣の進まざるより棄てしは亦畫に  
明神の神職より澄足もりに使を以て一平紙を以てして果  
ハ日こみあれども程棄てしは或は神職の人も果  
れまて今ハ他人ふまさんとしく画工既ハ換りて人筆を撰  
んとみざる日み足と聞込と急ぎ明神の社ふより遷滞の  
言解しや即日筆を撰り僅ふ三時間と過ぎせしき上たれ  
むハ手と拙と三年間かりりて催はりたる画が三時間  
小出来たりと笑ひたるより後ハ氏が考み然異表と出り他  
と目トからざるも斯の如く亦ハ同いたる獅子知是あり大  
森彦七が鬼女と闘ふ同ハ大矢田村の講中ハ新水とまし成  
田不動のき額あり又野見宿禰と當麻蹴速が角力の圖ハ湯



島を満宮開帳のとき其氏子より頼を請へ奉りたる者あり  
りやも頼を奉り出せし深の砂子の老いせしと且頼を  
まが故み只是等の物を揚ては事ありと云証と為すのこ

○小澤芳兵衛の像を画く

照澤町の煙子高小澤芳兵衛と云し若あり長病小雅り医  
療を考へたれども驗されも駒込町の草津温泉水事り  
湯治を考へ居れり然るに曉斎氏も此温泉水遊びおはたり  
し小網町の麻屋久吉と芳兵衛といふて遊をある中板  
久吉は芳兵衛の座敷を見舞おはせ曉斎が一回おは居る  
よしを話しけきバ芳兵衛大いお喜び然るに先生を待と  
我が姿を画り苦ひ呉らせよと頼れ久吉は氏が許お到りは  
申と話すと氏お肯諾しと直ふ芳兵衛の座敷おはせ骨の

曉斎氏芳兵衛へ  
骸骨を描きて病  
苦を示しの図

此の像の  
名は





全神を画きて貴元ハ程なく波様も深小成ぞと示しけれ  
 バ芳を清も又悟る処ありて大い小教び浮世の念を絶たる  
 ケ故小醫師の診察より猶半半餘りの命を延たりとある

○尾上菊五郎が所有する出雲の画

初代尾上杉師ハ出雲愛比の名人ホシテ其様概は掛とうい  
 自ら是と裏送りテ許意小用たりとある  
 出雲と云ふ小妙と浮たりしむ遂不出雲ハ尾上家の持  
 成と成さるが如し同りて杉師以来出雲の画ホシ出末物  
 何れバ是を求め所花と做したる故方今ホありてハ既小教  
 百種の出雲の繪を集め浮し出雲ホ成とソホも聲云ホ何ら  
 ずと算ま一日晴富ハ尾上重五郎ガ家ホ至り是と見ろ小京  
 小人の噂ホ速ワケ終日ハも看考されぬ程り出雲と云

狩野素川姑獲鳥の図  
尾上菊五郎所蔵



以て示す  
 情の世に  
 心

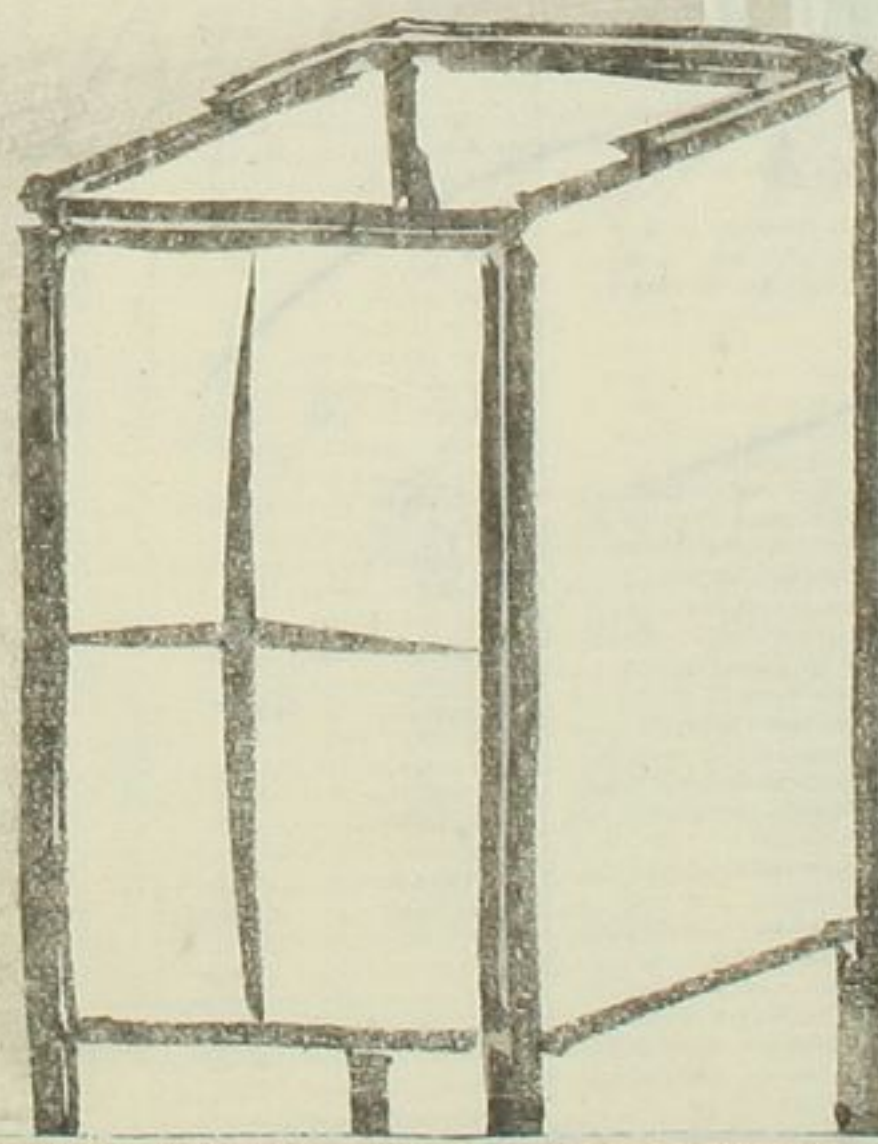


時齋幽霊の図  
尾上菊五郎所藏



時齋幽霊の図

郁同



しつと並べ且氏あり出雲の画を乞ければ元来氏の新異形  
 の物と画くと好むの癖あり故一言の元小是と背離あり  
 其所氣中ふるき新圖と物一み池の出雲中より狩野嘉尚の  
 画一し出雲と撰字なりたれが合しつば知小出せり夫出雲  
 の或ひの有物と或ひの有物とを任意に在る物と爲る  
 も是と見たりと言者多くい虚小し信と考る小是らす因  
 玉染のぬれを知らるしそれ雷の古鼓と負ひ鬼の虎の皮  
 の接鼻程をメたると一段少し出雲の姿も悲涼より出たる  
 もの故河を真と一河を虚とせんやぬれを只その筆意  
 といりあり品一氣小見え新し有らうや思ひ多し挿少画く  
 とお手上手とい言あらんた小掲げさる喜阿及び時齋の  
 画ける杯と出雲のまとはしつて可あらんり



○子弟として字を専らふ者一む  
 世に未だ文字を始む一切の物と画と書と通用させ或  
 ひは後不傳えしを言れば何品も限らざるを言して用ひ辨  
 せし物故書と字を分ちて一めて能く其を言まると覺えし後  
 小筆意と字あり固く字生い元筆意の情飾元と飾と全  
 して而して後小妙子の域に至るべし特上近年字意未  
 一切の物とて不實あり取り池沼又其を取らざる事のと  
 づり固く我流の画もを始ふ返り孫字生しして土甚と固め  
 るべうと以て氏に初まづの生徒を教ゆらば花鳥虫魚獸  
 の美別る春の春の物を以て秋の秋の物を以てして字  
 生と筆一とありあり人小所て筆を畫し又竹一筆と  
 画と梅龜物とどのと画く者何れとも是らに傍らの慰と

小しく画術を専門と為す者有らざるあり画と以て専門と  
 為す者い目ふ己えり程の物品あり何れも其れを能  
 画と字生あり得ると以て画と書とを兼せしむる能  
 少年筆が梅の枝を折るれば亦不足と字生させ轉輪地と  
 と捕え兼せし又其不足と字生させ或は野に連ねて野の廣  
 漠たる風景と字させ或は山に透して樹木の森たる有  
 様と字生させし専ら其より導を教ふるとある固く氏が少  
 年の生徒を教ふる様と圖せしを尤も掲げし幼稚の者も物  
 とは為しぬ

○周三郎暎雲氏豊子暎の筆氏の勉強

及門人等競ふる字生を勉む





暁齋氏門人へ  
寫生を教ふるの図



暁齋圖





寫生  
猫の  
曉齋氏

如豆  
洞  
寫生

外ノ三十



元人毛益筆意

毛益筆

明後主  
存古地言

惺惺  
不  
死  
乃

毛益白





明正牛至五月廿七日  
如谷里味心作  
熊命

同猿の寫生

外ア三十一



同寫生鷹の図

修三時新  
熊命



同鶏の寫生



同亀の寫生

外ノ三十二

同寫生



こさく

とん  
あう

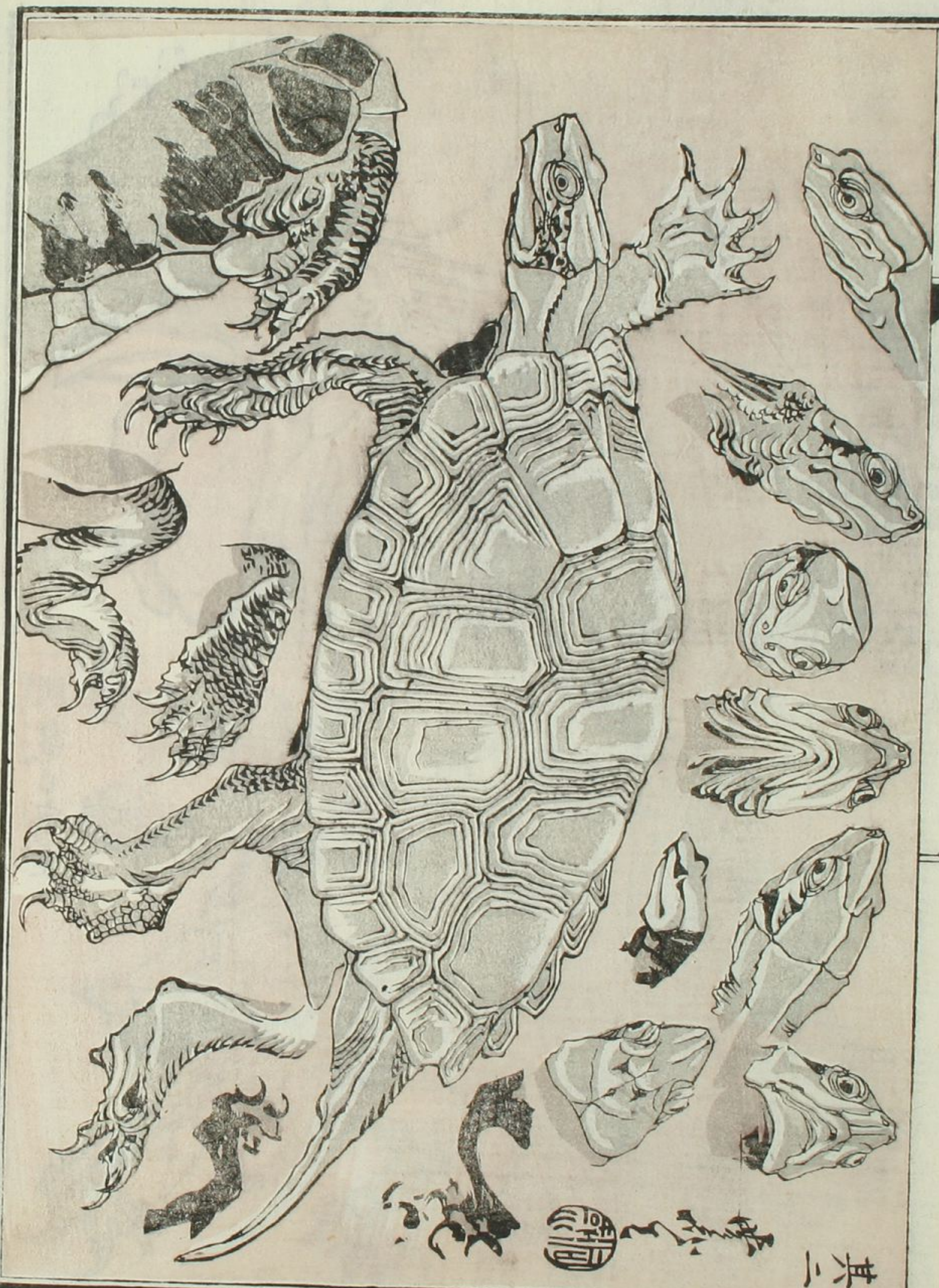
せこ

かわら

もぐら

こうもり





其二

暁齋の筆

暁齋の男周三郎の筆



暁齋の筆



曉齋氏の娘豊子の画



曉翠女

外ノ三十三

後編小顯々全躰の圖の一二を出せ

外ノ三十四

住吉弘定の箱書

大中臣能宣朝臣之圖

左京大夫信實朝臣真蹟

住吉弘定誌

同裏古筆了伴の書付

治部卿從三位紫兼々真跡

能宣朝臣

ちとせすれ

畫賛

古筆了伴



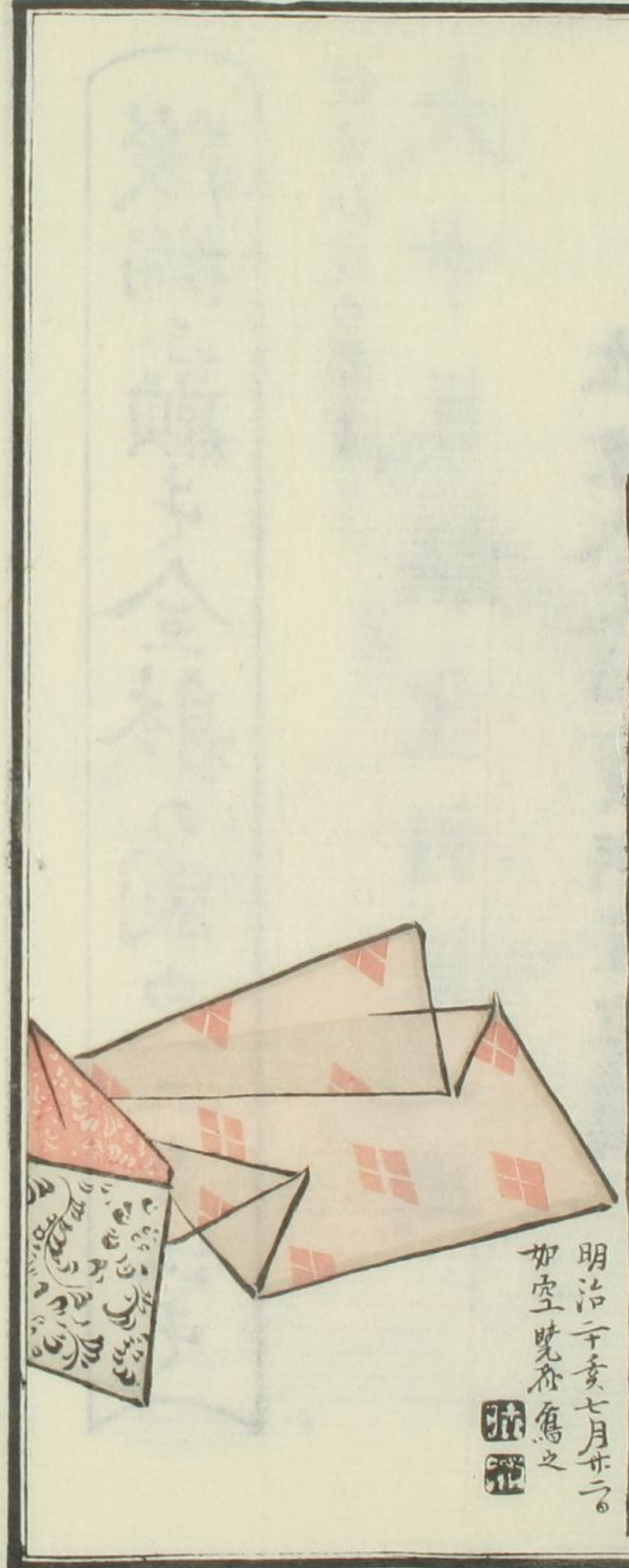


土佐信實の画平業兼の讚  
河鍋曉齋の蔵  
 紙中横九寸一分  
 業兼ハ平相国清盛の祖三位正衡五代の孫元久三年  
 從三位治部卿小任也後兼元三年五月十三日出家也

平業三和師 能宣朝臣  
 ちよせまて

清讚 癸酉七月

明治二十五年七月廿二日  
 如空院 寫之



能宣朝臣

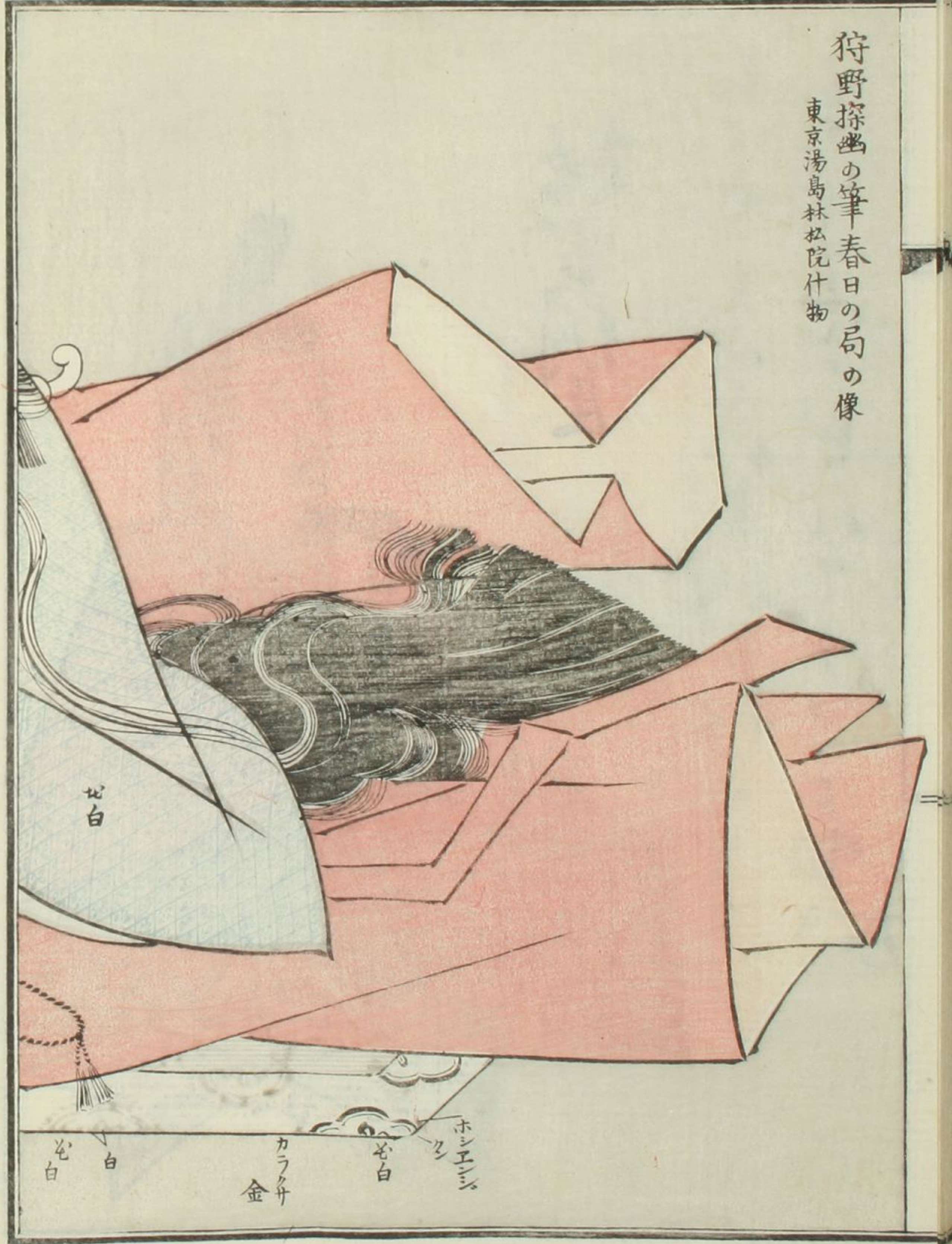
ちよせまてかきれる松毛しる  
 ちよせまてかきれる松毛しる



上ノ冊五



狩野探幽の筆春日の局の像  
東京湯島林松院什物



白

ホシエシ  
カラク丹  
金  
白  
白



カラク丹  
金  
花  
地  
アサギ

白  
白

上ノ三十六



出板者曰猶晚高先生不諳了有名之古画の中より最出来  
 よき物のを撰と其全伸の圖と出して二冊小は立内編  
 の後編と爲し又先生が例の画を以て画を出せし工更  
 の新圖且その得さの狂画より精密な書生倣したる物を  
 集めて二冊小は立是を外編の後編と爲し追く出板は及  
 附言 古画の年曆雲谷曾我長并川狩野の末流土依住吉の  
 末流時歴等を詳細小志として後編小出

曉齋畫談外編卷之一

